

3. 経 営 成 績

(1) 当中間期業績等の概況

- 業績の状況

当期の我が国経済は、景気の長期低迷に加え夏期の異常気象や米国における同時多発テロの影響などによって、消費が一段と冷え込み、全体として厳しい状況が続いております。とりわけ医薬品業界は、医療費適正化諸施策の浸透などによって、ますます難しい事業環境におかれており、又、海外では、米国をはじめ欧州やアジア地域の経済にも減速感が強まっております。当社は、このような状況の中で、新製品の投入や新市場の開拓など積極的に営業活動を展開しましたが、当中間期の売上高は1,400億4千5百万円余（前年同期比1.2%減）になりました。

事業の種類別売上高は次のとおりです。

セルフメディケーション事業	102,462百万円（前年同期比 1.9%減）
医 薬 事 業	37,583 "（ " 0.6%増）
合 計	140,045 "（ " 1.2%減）

国内における売り上げ動向は次のとおりであります。

セルフメディケーション事業では、ドリンク剤「リポビタンシリーズ」は新製品「リポビタンD」や「リポビタン11」などの貢献があって微増でした。なお、主力の「リポビタンD」は薬局チャンネルでの停滞と新チャンネル開発の遅れ等によって微減でした。風邪薬「パブロンシリーズ」や胃腸薬は堅調な伸びを示しました。また、壮年性脱毛症における発毛剤「リアップ」は発売当初の爆発的なブームの沈静化などもあって19%強の減少となりました。

医薬事業では、仕入れ商品のペースト状骨充填剤「バイオベックス」が流通在庫の調整により大幅に減少、末梢循環改善剤「パルクス注」も9%減少しましたが、主力のマクロライド系抗生物質「クラリス」が上伸、2月に新発売した非ステロイド性消炎鎮痛剤「ロルカム錠」の貢献などによって全体では前年実績を上回ることができました。

海外におけるドリンク剤の売り上げは、フィリピン、上海、インドネシアなどのアジア市場を中心に概ね順調に推移しました。

利益面につきましては、前記のような国内の売り上げの減少と広告宣伝費、販売促進費など諸経費の増加によって、経常利益は386億3千3百万円（前年同期比9.5%減）、中間純利益は217億9百万円（前年同期比10.7%増）となりました。経常利益が前年同期比減少したのに対し、中間純利益は217億9百万円と前年同期比10.7%（21億6百万円）増加しましたが、これは前年同期に特別損失として退職給付会計基準に基づく会計基準変更時差異86億円余を計上したことが主因であります。

- 連結キャッシュ・フローの概況

当中間期末における現金及び現金同等物は181億8千6百万円で、前年同期末に比べ10億7千6百万円減少いたしました。

（営業活動のキャッシュフロー）

営業活動の結果得られた資金は231億8千8百万円（前年同期比39億4百万円増）となりました。これは税金等調整前中間純利益367億6千4百万円（前年同期比29億2千1百万円増）、減価償却費65億2千7百万円（前年同期比6億4千7百万円減）のほか法人税等の支払額が190億2千9百万円（前年同期比16億5千4百万円減）あったことなどによるものです。

（投資活動のキャッシュフロー）

投資活動の結果使用した資金は195億2千1百万円（前年同期比53億9千4百万円増）となりました。これは主に岡山工場のドリンク剤ラインの増設や大宮物流センターの建設など有形固定資産の取得87億1千6百万円（前年同期比48億5千9百万円増）や投資有価証券の取得による支出176億8千3百万円（前年同期比50億8千9百万円減）などが増加したことなどによります。

(財務活動のキャッシュフロー)

財務活動の結果使用した資金は84億7千7百万円(前年同期比83億2百万円減)となりました。これは配当金支払いが84億9千4百万円(前年同期比6千4百万円減)からなりますが、前年中間期比83億2百万円の減少は、前年中間期に自己株式の取得による支出84億円によるものです。

(2) 通期の見通し

下期は一段と厳しい事業環境が続くことが予想されますが、引き続き積極的な営業活動の展開および経営全般の効率化などを推進してまいります。

この結果、通期の連結業績は次のとおりとなる見通しであります。

(平成13年3月期比)

売 上 高	2,755億円	(0.4%増)
経 常 利 益	672 "	(9.0%減)
当 期 純 利 益	391 "	(25.0%増)